

高座海軍工廠と台湾少年工——日台関係史の一断面
**Koza Navy Arsenal and Taiwanese Child Laborers (Shonenko):
 A History of Japan-Taiwan Relations**

藤田 賀久

Norihisa Fujita

要旨: 太平洋戦争中の 1943 年から翌年にかけて、日本統治下の台湾から約 8,400 人の少年が日本本土に渡り、終戦まで海軍戦闘機の生産に従事した。主な勤務先は神奈川県の高座海軍工廠(神奈川県)であり、終戦までに 128 機の局地戦闘機「雷電」を製造した。他にも日本各地で戦闘機の生産に携わった。本稿は、日台で著された回想録や元少年工に対するインタビューなどによって、台湾人少年が志願した理由や日本での生活、そして終戦後の少年工が置かれた状況などを論じることにより、戦中戦後の日台関係の一断面を提示する。

キーワード: 高座海軍工廠、少年工、台湾、雷電

Abstract: At the height of the Pacific War, approximately 8,400 Taiwanese youngstars left their home to the mainland Japan. Their mission was to manufacture Japan Imperial Navy's fighter intersepter "Raiden" at Koza Naval Arsenal in Kanagawa. Some of them were dispatched to other arsenals. This paper tries to describe their intention, thoughts, and lives in Japan during and after the war by inquiring into their memoiors, available official documents, and interviews with former Shonenkos (Child laborers), aiming to shed light on the untold story of Japan-Taiwan relations in the past and present.

Keywords: Koza Naval Arsenal, shonenko (child laborers), Taiwan, Raiden

はじめに

多摩大学湘南キャンパスから数キロ北に位置する厚木飛行場は、現在は日米共同管理下にあるが、昭和 17 (1942) 年に設置された当初から終戦までは日本海軍の飛行場として首都防衛の任務を帯びていた。本飛行場を拠点とした海軍第 302 飛行隊の司令官小園安名大佐は、終戦を告げる玉音放送の直後、「必勝ノ信念ヲ堅持シテ、草ノ葉ヲ嚙ンデモヤルトイフ意気込ミデ行ケバ此ノ戦ヒハ勝ツ」¹と徹底抗戦の檄を飛ばした。しかし結局は降伏を受け入れざるを得ず、昭和 20 (1945) 年 8 月 30 日には「バターン号」と命名されたダグラス C54 を厚木飛行場に迎い入れた。トレードマークのサングラスとコーンパイプという姿でバターン号から現れた連合国軍最高司令官マッカーサー元帥は、周囲を一瞥してタラップを降り、待ち構えていた記者団に対して「メルボルンから東京まで長い道のりだった」という有名な言葉を残した。

この戦後日本の到来を見守る人々の中に、台湾人少年がいた。その 1 人の林金坤 (元中

興大学教授)は、「パイプをくわえて飛行機から降りるマッカーサーがたいへん印象的だった」と回想している。正確な人数を知る術はないが、林は「私たち高座工廠の台湾人も厚木航空隊まで、マッカーサー元帥の歓迎に行かされた」と証言していることから、複数の台湾人少年がいたと思われる。²

「高座工廠」とは、厚木飛行場の北西に隣接した「高座海軍工廠」を指す。本工廠には、多くの台湾人少年が終戦まで働いていた。彼らは、戦況が不利に傾きつつある昭和18(1943)年から翌年にかけて、米潜水艦の脅威が覆う東シナ海を渡って日本本土に上陸した。その総数は8,419人、14～15歳の幼さが残る少年が多数を占めた。日本上陸後は、大和市上草柳に設けられた8,000人収容可能な寄宿舎に居住し、高座海軍工廠までの片道4キロを毎日行進して通った。

高座海軍工廠(当初は「空C廠」と呼ばれた)は昭和19(1944)年4月1日、現在の相鉄さがみ野駅の北側に設けられた。敷地は現在の座間市と海老名市に跨った。現在、工廠が存在したことを示すのは、さがみの駅から北に伸びる直線道路と、西側に位置する芹沢公園内の地下壕のみである。地下壕は空襲から工廠の機能を守るために掘られ、物資倉庫や変電所も備わっていた。³

高座海軍工廠が生産したのは局地戦闘機「雷電」であった。戦局悪化に伴い米爆撃機B29が日本上空に侵入して焼夷弾を投下したが、当時の日本海軍が誇る零戦といえどもB29の飛行高度まで上昇して迎撃することは困難であった。そこで、航続距離や操縦性を多少犠牲にしても上昇能力と速度を最大限に追求した局地戦闘機に期待が集まった。高座海軍工廠で生産された「雷電」21型は、設計上では6,000メートル上空まで5分38秒で上昇し、最大速度は596キロメートル(5,450m)と抜群の上昇能力を誇った。この雷電生産の主力を担ったのが台湾人少年であり、高座海軍工廠では128機の雷電が生産されて厚木飛行場の第302飛行隊に引き渡された。

台湾人少年工は、高座海軍工廠の他にも愛知県の三菱重工業、茨城県の中島飛行機、兵庫県川西飛行機など、当時の日本が誇る軍需工場に派遣された。そして各地で空襲の犠牲を払いつつも「祖国日本」のために戦闘機生産に従事したのである。

台湾人少年工は、終戦を境に日本人から中華民国国民となった。敗戦国民から戦勝国民へと転じたのである。しかし、日本の支配から台湾を「解放」した国民党は、台湾住民を腐敗と弾圧で支配することになる。台湾人少年工は日本で戦争と空襲に耐え、故郷に帰った後も、長く厳しい時代に生きることを強いられたのである。⁴

台湾人少年工に関する学術研究は少ないが、日台で回想録や資料集が出されている。また、元少年工が結成した「台湾高座会」や、高座海軍工廠で働いた日本人の元軍人や工員、学徒、挺身隊らによる「高座日台の会」「高座日台交流の会」は、現在も積極的に日台交流を推進している。例えば平成29(2016)年5月には元少年工とその家族計27人が来日して靖国神社参拝と大和市を訪問した。⁵ 11月26日は台中にて「70周年記念連誼大会」が開

催される予定である。交流の場では、元少年工が「大和は第二の故郷」と語り、日本人は彼らの苦勞に感謝を表明する。こうして、かつて同じ「日本人」として戦った「戦友」が国境や世代を超えて今も友情を深めているのである。

本稿は、『難忘高座情——二次大戦日本海軍秘史之一 台湾少年在日本造飛機之奮闘史』『高座海軍工廠台湾少年工寫真帖』等、台湾高座会が編纂に関わった資料を中心に、日本と台湾で刊行された論稿、私家版の回想録、防衛省防衛研究所所蔵資料や近隣自治体（大和市・座間市・海老名市）の調査結果、さらには元少年工や台湾の研究者に対するインタビューを加えて、少年工の軌跡を総括し、さらなる研究発展を期するものである。

1. 高座海軍工廠と台湾人少年の来日

1.1 台湾少年工の募集計画

太平洋戦争開戦から半年が過ぎた昭和 17 年 6 月、海軍省兵備局長は神奈川県知事に対して「海軍航空兵器製造工場新設の件」を通達した。それは、「神奈川県厚木海軍飛行場附近敷地四〇〇万平米」に「航空兵器ノ大量生産ヲ目的トスル海軍工場ヲ新設」することを告げ、用地買収等の便宜を求めるものであった。⁶

設立準備事務所は横須賀の海軍航空技術廠内に設けられた。昭和 17 年 10 月の工廠設立準備資料によると、「空 C 廠」（計画段階における高座海軍工廠の呼称。元少年工は今もこの名称を用いる）は 1 万人以上の工員が働く生産工場とし、生産能力は「小型機月一〇〇基、中型機月一〇〇基ノ機体ノミノ多量生産工場ナリ、小型機ニ換算スレバ年五、五〇〇基又ハ六、〇〇〇基ニ相当スル世界有数ノ工場ナリ」との目標が掲げられた。まさに「日本最初ノ最大機体生産工場」を目指す野心的な構想であった。⁷

しかし、当時の日本が計画実施に必要な工員を集めることは困難であった。既に多くの青年は徴兵されて戦地に赴き、少年少女も勤労働員や挺身隊として全国の軍需工場で働いており、既存の生産施設でも工員不足が叫ばれていたからである。そこで、新工廠に大量かつ安定的な工員供給を図るために注目されたのが台湾である。⁸「全工員ノ半数以上ヲ台湾本島人青少年ヲ以テ充実スルコトハ日本労働史上最初ノ計画ナリ」と「空 C 廠ノ特異ナル点」を強調し、豊富な労働力が残る台湾から「青少年」を集めることによって、「工員ノ増員率ハ日本第一ノ最短期間」となることを期したのである。⁹

募集すべき台湾人少年の人数に関しては、昭和 17 年 12 月段階の計画では昭和 18（1943）年 4 月に 1,000 名、同 10 月に 2,000 名、翌 19 年 4 月に 5,000 名、昭和 20 年以降は毎年 4 月に 5,000 名を採用することで、常時 25,000 人から 30,000 人を確保する方針を立てた。また、5 年の任期後には台湾へ帰還する工員が予想されるので、定数維持のために毎年採用することを決め、その人数は前年 6 月頃までに決定して台湾総督府に通知することとした。¹⁰

募集は、海軍が台湾総督府に依頼し、台湾の国民学校高等科、および中等学校で志願を

募る方針を立てた。身分は海軍軍属の工員見習とし、学業優秀、心身強健、両親の承諾を要件とした。待遇面に関しては、衣食住や給金の支給、付属の養成所における教育機会の提供により 3 年後には国民学校高等科卒業生に工業学校卒業資格を、中学校卒業生には高等工業学校卒業資格を与えることとした。

台湾人少年を故郷から遠い地で働かせることに対する配慮も考えられた。例えば少年を監督する者は、台湾人の風習、年度行事、気質、教育状態、出身地等の特性に注意を払うことを求め、台湾少年が「望郷ノ為、神経衰弱トナラザル様」に「東京、軍港等ノ見学」「毎月一回ノ家庭通信」「『プラスバンド』ノ編制」「慰問映画」などの機会を与えることとしている。

さらに台湾で待つ父母に対しては、特に母親が子供を遠い日本に送ることに躊躇すると予想し、「父母、特ニ母親ヲ安心セシムルコト」とした。その対策として考えられたのは、「工員生活ヲ映画トシ、台湾各地ニテ映写ス」「総督府及州ノ旅費ニテ、父兄、校長等ヲ C 廠ニ派遣シ、工員ヲ激励ス」ること等である。¹¹

こうして台湾人少年工の募集が始まった。上記の計画に関して注意すべきは、10,000 人規模の高座海軍工廠に対して 25,000~30,000 人の台湾人少年工の常時確保を図ったことである。これは、他の軍需工場に派遣することが念頭にあったと思われる。しかし、終戦までに海を渡った少年は約 8,400 人に留まった。また、少年工の父兄や校長が日本本土に来る機会はずいぶん来なかった。

1.2 台湾人少年の志願理由

次に、台湾人少年が高座海軍工廠を志願した理由を考えたい。台南州北港郡（現在の雲林県）にて昭和 2（1927）年に生まれた陳碧奎は、小学校 6 年生の時に教師から少年工募集を聞いた。昭和 17 年 12 月のことである。教師は、戦況の激化に伴って軍が飛行機や弾薬をさらに必要としているが、すでに多数の青年が前線に出ており生産を担う工員が不足していること、日本政府が台湾人少年に本土の飛行機製造に従事することを希望していること、少年工には給料が支給され、勉強機会も与えられ、小学校卒業生は 5 年後に工業学校卒業資格を獲得できることを生徒に伝えた。

音楽を除き成績優秀である陳は志願資格を満たしており、少年工の募集に応じることで技術と学歴を得て将来の人生を切り拓こうと決断した。しかし、保護者の同意は得られなまいと考へ、無断で父の印鑑を借用して保護者の同意書を作成した。後にこれを知った父は、腰からベルトを抜いて陳の背中を打った。¹² このように少年本人が志願するが親が反対する例は、多くの少年工に共通している。

東俊賢もその一人であった。昭和 5（1930 年）に台南東部の山中で生まれ、台南市街の末広公学校で寄宿舎生活を送っている時、学校で映画「燃ゆる大空」を鑑賞し、学校上空には近くの台南海軍航空隊（台南空）に離発着する零戦が飛来していたことで飛行機に憧

れ、航空士官の夢を抱いた。昭和 16 (1941) 年 12 月 8 日の日米開戦時には、台南空からフィリピンへ向かう戦闘機や爆撃機の雄姿に心が躍った。そして、公学校卒業後は少年航空学校を希望したが、一人息子の東を案じる父は強く反対した。次の選択として工業学校で無線を学ぶことを欲したが、父は「電機は感電するので危ない」と反対して農業学校や商業学校への進学を強く求めた。そこで東は商業学校の受験を選択したが、日本の東南アジア占領に伴い、貿易商となって南方進出に夢を抱く台湾の若者が続出したため、商業高校の人气が高まり競争率も厳しくなった。東はこの難関を突破した。

商業学校の教員は、航空兵学校や高座海軍工廠への志願を強く勧めた。学校で「決戦の大空」「飛行機組立」の映画を見たことで飛行機への憧れを一段と強くした東は、衣食住の官費支給に加えて月給が支払われる高座海軍工廠に強く惹かれた。また、日本内地に行けることも魅力であった。戦争勃発により、楽しみにしていた公学校の日本内地への卒業旅行が取りやめとなったことも、日本本土へ渡航したいと強く願う理由であった。東は、少年工を経て甲種工業学校の資格を得て技師となるか、航空分野や工科分野への進学を夢見て志願を決断した。

しかし、父の不同意は予想できた。そこで、下宿屋近くの判子屋で 93 銭の認印を購入し、親の同意書を偽造した。教員は疑ったが、東は嘘をついた。父は下宿に駆け付けて志願取り下げを促し、父の依頼で公学校教師も説得に当たった。しかし「天皇陛下のお役に尽くします」と言ったため、教師は説得を諦めざるを得なかった。¹³

多くの台湾人少年は、上記のように自らの意志で高座海軍工廠に応募したのであるが、中には貧しさから脱して運命を好転させようとする者もいた。大正 14 (1925) 年に台北で生まれた宋定國は、幼年時に母がいなくなり、公学校 4 年の時には父も他界したため、兄に「学校を辞めて家の手助けをしろ」と言われた。しかし担任の小松原次郎は「せめて公学校だけは、どんなに苦しくても卒業しなさい」と諭し、授業料や学用品などを与えて学業継続を助けた。こうして公学校を終え、台湾唯一の夜間中学成淵校（現在の成淵高級中学）で空腹と仕事の疲労に耐えて勉学に勤しんだ。¹⁴高座海軍工廠に志願したのはこうした苦しい境遇に置かれた時であった。

台湾人少年に工員募集を伝えた日本人教員に宮本直人がいた。昭和 17 年に高雄州旗山第一国民学校（現在の高雄市旗山区旗山国民小学校）高等科の担任に就いた熊本出身の宮本は「芝山巖精神」を教員の理想としていた。工員募集の知らせを受けた時、台湾の志願制が徴兵制になるのも時間の問題だと考えた。3 年勤務すれば小学校高等科卒業者は工業学校卒業者と同等の資格を与えられる好条件も手伝い、家庭が裕福でなく上級学校進学が厳しい少年達は、宮本によれば「一も二もなく飛びついた」。彼らは「思っても行けない日本への憧れ、進学の誘い、夢は限りなくふくらんで希望に燃えた優秀な少年達」であった。そして旗山第一国民学校からは 13 名が合格した。宮本は合格理由を「学力と体力、日本人としての自覚と資質、誠心が買われたように思う」と振り返っている。¹⁵

1.3 台湾から日本への航海

台湾で採用された約 8,400 人の少年工は 7 回に分けて日本に運ばれた。その第 1 陣は昭和 18 年 5 月に来日した約 1,800 人である。彼らが高座海軍工廠の 2 期生と呼ばれるのは、北関東の小学校高等科卒業生を主とする約 200 人の日本人が 1 期生となったからである。本項では、7 期生まで続く輸送実態を、台湾高座会『難忘高座情』をはじめとする資料を参考にしつつ紹介する。

台湾全土の国民学校（公学校）と中等学校から志願して合格した少年達は、まず高雄近郊にある海軍岡山第 61 航空廠（以下「61 工廠」。現在、この地は中華民国空軍航空技術学院が建つ）に集められた。61 工廠で輸送船を待つ期間は海軍式の基礎訓練を受けたが、その期間は各期で異なった。

台湾人少年の渡航第 1 陣である 2 期生は、61 工廠から高雄港に進み、「さんとす丸」と「鎌倉丸」の 2 隻に分かれて搭乗した。先発のさんとす丸は 5 月 1 日に 800 人の少年工を載せて 8 日に横浜港に到着、鉄道を利用して大和の寄宿舍に到着した。これに少し遅れて出港した「鎌倉丸」は、1,000 人を載せて 5 月 16 日に横浜港に到着した。

さんとす丸で渡航した台南出身の王溪清は、卒業 3 日後に同窓 11 名と共に 61 工廠に到着し、5 月の出発まで簡単な海軍用語や基礎訓練を受けた。ビンタなどの「海軍儀礼」を教えられた時には、「こんなところに入るのではなかったと後悔した」。2 ヶ月も 61 工廠で待機したのは、「船舶が次々東シナ海で撃沈され、次第に輸送計画に狂いが生じ」たからであると考えている。¹⁶

さんとす丸は高雄港から一旦南下してバシー海峡で北に進路を取った。そして、潜水艦攻撃を避けるためジグザグ走行で日本に向かった。遠方に富士山が見えた時の船内は万歳三唱が響いたが、さんとす丸は東京湾手前で停泊し一夜を過ごした。機雷が敷設されていたためである。翌朝、微速で横浜に入港する船内の少年達は恐怖に襲われた。王は「船が衝突した時、爆発音と同時に撃沈、そして東京湾の藻屑と消えて、我々も共に沈んで行く、考へただけで身の毛がよだつ」と回想している。¹⁷

太平洋を渡って横浜港に向かう航路を採ったのは、2 期生を輸送したさんとす丸と鎌倉丸のみであった。米潜水艦の脅威が高まったためであり、以降の輸送船はすべて東シナ海から対馬海峡を抜けて瀬戸内海を通る航路を選んだ。また、この 2 隻が護衛を付けずに太平洋を横断したことに批判が高まり、以降はすべて護送船団方式となった。¹⁸

2 期生の出発から約 1 ヶ月後の昭和 18 年 6 月初頭、3 期生となる少年が 61 工廠に集まった。その数は約 1,200 人であり、6 月 22 日に高雄港から「浅間丸」に乗船した。台湾から日本までの航路は米潜水艦との遭遇を回避するために中国沿岸を沿って北上し、朝鮮半島の南端をかすめて対馬海峡を通過、瀬戸内海を通り神戸港で船を降りると東海道線で神奈川県に向かった。

4 期生約 1,000 名は 7 月に 61 工廠に集合し、配船の都合で待機させられる間は炎天下の

過酷な訓練を受けた。出航は高雄港ではなく、岡山から鉄道で台湾北部の基隆港に向かい「白陽丸」に乗船、他の輸送船や護衛の駆逐艦を含めて13隻の船団を組んだ。

最初の寄港地は上海であり、青島を經由して渤海湾に入り、対馬海峡を通り門司で停泊、神戸港には9月12日に到着した。白陽丸に乗った林延祺は、基隆から上海までは21時間を要したと明確に覚えている。なぜならこの間、32人が詰められた8畳の船室の中で船酔いに苦しみ、常に時計を見ていたからである。少しでも動く嘔吐するのでトイレにも行けず、何も口に入れることはできなかった。しかし、船に強い人は平気で、「おいしい」と言いながら食事を取っていた。¹⁹

三ノ宮駅から東海道で藤沢まで向かう際、途中で停車した名古屋駅では温かい弁当が振舞われた。李雪峰（現台湾高座会会長）は、これまで食べた如何なる食事よりも美味しく、これ以上の食事はその後もなかったと語る。²⁰

第5期生は中等学校卒業生のみで構成された200人であった。彼らの卒業は昭和19年3月であったが、少年工に合格したために昭和18年12月に卒業を繰り上げられた。そして12月下旬に61工廠に集合、12月28日に高雄港から「浅間丸」に乗船、やはり米潜水艦を避けるため中国大陸沿岸を沿って北上し、台湾海峡、東シナ海を抜けて昭和19年1月3日に佐世保港に到着、鉄道で大和へ向かった。

第6期生は2,000人を数えた。昭和19年3月に61工廠に集結したため、卒業式を欠席する少年もいた。先発隊1,000人は鉄道で北上し、基隆港で「鴨緑丸」に乗船、4月4日に出航した。しかし直後に米潜水艦の出没情報を受けたため直ちに基隆港に引き返し、翌日に再出航、4月9日に門司港に到着した。

第2班は4月12日に高雄港から「あらびあ丸」「箱根丸」「北京丸」に分かれて乗船、他の輸送艦と合わせて約30隻の船団を組み、3隻の巡洋艦と駆逐艦に護衛されて北上し、関門海峡を通過して宇品に入港、広島駅まで徒歩で向かい、鉄道で大和に向かった。途中の岡山駅を通過する際は台湾の岡山駅と名前が同じであると驚き、名古屋駅では少年工を歓迎する愛国婦人会が提供したお茶の味に感動している。

7期生は昭和19年4月中旬に台南・高雄から61工廠に集合した約2,000人であり、彼らが最後の少年工となった。その理由は、台湾から日本までの海路がさらに危険となったからであると思われるが、この証拠となる史料は管見の限り見つからない。²¹

61工廠で約1ヶ月の待機中、高温や水質等が原因で岡山に赤痢が流行し、罹患する少年も発生し、渡航を諦めざるを得ない者もいた。5月12日夜に鉄道で基隆港に向かい、翌日早朝に「浅間丸」で出航した。2隻の駆逐艦が左右を守りつつ中国大陸沿岸、対馬海峡、瀬戸内海を経て神戸港に到着すると、三ノ宮から専用列車で大和に向かった。

こうして、合計8,400人の台湾人少年工は2期から7期に分かれて日本に渡航した。『難忘高座情』執筆にあたり輸送実態を調査した元少年工は、一隻として米潜水艦の攻撃を受けなかったことは非常に幸運だと語っている。²²

多くの少年工は、台湾を発つ船を待つ間、家族や故郷を離れる寂しさが尋常でなかったと振り返る。61 工廠で配船を待つ間は日曜日に限って肉親との面会が許されていたので、これが何よりも楽しみであった。4 期生の陳碧奎も出発直前になってようやく父が来てくれた時を回想している。父は陳の好きな飴をたくさん持参してきており、「日本に行ったら自分のことは自分でするように。常に手紙を書いて寄こすように」と言い付けた。この時、陳は「未来がいかにあるとも、勇敢に立ち向かい、日本では一層努力して成功し、故郷に錦を飾る」と決意を新たにした。²³ 日本で自らの将来を拓く気概と家族から離れる寂しさは、多くの台湾人少年が共有した心境であった。

2. 日本における台湾少年工

2.1 海軍高座工廠における生活

台湾人少年工の第 1 陣となる 2 期生は、昭和 18 年 5 月 8 日に横浜上陸、直ちに大和市上草柳に設けられた台湾人少年工専用の寄宿舎に向かった。現在の小田急江ノ島線大和駅と鶴間駅の間西側に位置する。とはいえ、建設工事は 4 月に着工されたばかりであり、2 期生到着時は建造中であった。完成時には、1 棟 200 人収容の木造 2 階建 40 棟が立ち並び、2,000 人を一度に収容できる食堂、大浴室を備えた。

3 期生の黄茂己は、昭和 18 年 6 月末に寄宿舎の最寄り駅である「駅とは言え駅舎もない小屋の様な所」であった鶴間駅に下車した。寄宿舎は「よく見ると屋根も壁も木の皮を剥いだ柿というもので建てたものでマッチ一本で丸焼けしその純木製品」に見えた。この時はまだ高座海軍工廠も完成しておらず、「『工場は?』ときくと『工場用地にはまだ、まくわ瓜が生っているよ』といわれたので、「あっけにとられてあいた口が塞がらなかった。同時に萬時を覚って目の前が真暗になってしまった」。²⁴

寄宿舎の舎監には藤沢市鶴沼国民学校校長の石川明雄が就いた。高座海軍工廠総務部長安田忠吉中佐の要請であった。石川舎監と共に寄宿舎に住んだ子息の石川公弘（現在、高座日台交流の会会長）は、台湾人少年工が毎朝「台湾軍」「台湾楽しや」を歌い行進していたのを見て、それはお互いを励ますためであったと振り返る。²⁵

寄宿舎では、冬は虱、夏は蚤に苦しめられた。冬の「大山下し」と言われる寒波は、南国台湾で育った彼らにとっては特に過酷だった。常夏の台湾から防寒着を持参する者はおらず、日本で支給された作業着は薄いスフ製だった。また、果物が豊富で油を使う食事に慣れた台湾人少年にとって、寄宿舎で出される油気のない大豆の締め粕の入った飯、副食がサツマイモかキュウリやナスの塩漬はあまりにも少なく、常に空腹に悩み、栄養失調から夜盲症や肺結核に掛かる者も出た。²⁶

ある時、海軍高座工廠飛行機部・作業係材料班の技手早川金次は、台湾人少年が工廠周辺の蛙を捕まえ、夜に焼いて食べている場面に出くわした。少年たちはきまり悪そうに早

川にも食べるように促した。早川は「哀れと思う方が先で、叱る気にもなれず『燈火管制だよ、火の洩れぬよう、又残り火に注意せよ』」と言って通り過ぎた。支給されている食料では不十分であることを痛感していたのである。²⁷

少年工の身分は海軍軍属であるため、海軍の規律に従った生活が求められた。早朝 5 時 30 分に起床し、「甲板掃除」と言われた廊下掃除の後、高座海軍工廠までの約 4 キロを行進して通勤した。生活や仕事では、海軍の慣習に従って 5 分前行動が厳守された。工廠では、雷電が完成すると軍艦マーチが流れ、工廠の全員が歓声を上げる中、隣の厚木航空基地に運搬されて海軍航空隊に編入された。終戦までに納入した「雷電」は 128 機であった。

生産数が当初の構想から比べると少ないのは、資源不足と空襲が原因であることはいうまでもない。高座海軍工廠の資材担当の 1 人に、昭和 20 年 4 月に海軍経理学校を経て着任した海軍主計少尉野口毅（現在、高座日台の会名誉会長）がいた。野口は、数千点に及ぶ雷電組み立て部品のうち、ボルトやナットの備蓄はあったが、日本に原材料がない風防ガラス、タイヤ、プロペラなどのひっ迫に苦しみ、再生や転用を繰り返して当座の需要を乗り越えた。しかし 6 月には雷電の試運転用燃料が足りず、三重県海軍燃料廠との折衝のため四日市まで出張したが、鉄道網は空襲で寸断されているなど困難を極める中、材料や燃料の確保に奔走した。²⁸

工廠は 6 工場から成り立っていた。第 1 工場は総組立と艤装、第 2 工場は熱処理と銅工（スポット溶接など）、第 3 工場は塗装と縫製、第 4 工場は機械と銅工、第 5 工場は翼組み立て、第 6 工場は胴体組み立てであった。胴翼工場で働いた第 6 期生の周吟郎は、「昭和十九年五月も後半に入ると、バリバリ仕事も出来るようになり、自分で仕事をしながら自分で検査してミスがあればその場で手直しする、つまり「治具下し」＝「検査済み」といった態勢で仕事を進めましたので、担当の機銃槽、フラップ等は、検査係りが見ていなくとも安心して次の取り付けが出来るからと、優先して製品を持っていかれるのが常となりました」と語っている。²⁹このように、少年工の技術は優れ、評価も高かった。

学習に関しては、当初は十分な機会が設けられた。石川公弘の研究によれば、月曜日から土曜日まで 1 日 4 コマ、火曜日のみ 6 コマで週 26 コマの時間割が組まれ、数学 6 コマ、物象（物理化学）5 コマ、「国民」（国文と公民）4 コマ、教練 4 コマ、体操 4 コマ、製図、英語が各 1 コマであった。高座海軍工廠が作成した英語教科書ではイギリス民謡「キラキラ星」の英詩が挿絵とともに印刷されている。³⁰しかし戦況の悪化に伴い次第に授業は削られ、終戦により卒業資格の約束も反故となった。

連日の厳しい作業ではあったが、課外授業や余暇を楽しむ機会もあった。例えば 2 期生の陳英群が残した日記に残る昭和 18 年 8 月 12 日の東京見学では、南林間から電車で参宮橋に行き明治神宮を参拝、神宮前で地下鉄に乗り虎ノ門で降りて日比谷公園を訪問、台湾総督府総務部長からの激励、宮城遥拝、靖国神社参拝などが記録されている。

週末には、多くの少年工が江の島や鎌倉を訪ね、海を見て故郷台湾を想い、海岸でさざ

えのつば焼きを味わった。『高座海軍工廠 台湾少年工寫眞帖』には、鎌倉の鶴岡八幡宮や大仏など各地を巡った写真が多数掲載されている。また、高座海軍工廠は、相模野地方の歴史を紹介する教本『高座の光』の作成も行った。本書の内容は、早川城（綾瀬市）、江ノ島、国分寺、小田原城、東慶寺、相模太郎、源頼朝、曾我兄弟などの郷土史や歴史的人物である。刊行の目的は、高座海軍工廠長中田實によれば「遠く父母の膝下を離れて居る青少年をして其の本務に挺身させる為」に「自分が住まひ且つ勤務して居る土地に対して興味を持たせ、愛着を感せしめること」であった。³¹

高座海軍工廠で働く台湾人少年を襲った最大の悲劇は、米軍艦載機の機銃掃射で6名が亡くなったことである。終戦間際の昭和20年7月30日朝のことであった。空襲警報が鳴り、夜勤を終えた少年工達は寄宿舎に帰らずに工廠で待機した。彼らを監督していた海軍技手の早川金次は、空襲警報解除後も工廠から4キロ離れた寄宿舎まで帰らずことに躊躇した。しかし少年工達は帰りたいと訴えるため、注意を与えて解散させた。その直後に一機で襲撃した米艦載機が狙ったのである。早川は、自分が帰ってもいいと言ったから少年達は死んだと生涯に渡って悔やみ続けた。

2.2 その他の工場における台湾少年工

約8,400人の台湾少年工は、大和の寄宿舎に到着後、高座海軍工廠の他に、戦闘機を製造する日本各地の生産拠点に派遣された。以下、主な場所を記しておきたい（人数や期別は『難忘高座情』掲載分）。

- ・横須賀海軍航空技術廠（横須賀市）
- ・海軍航空技術廠釜谷支廠（横浜市金沢区、6期生200人。「桜花」の爆弾を製造）
- ・横須賀海軍工廠（横須賀市、7期生3～400人。本工廠は艦艇を生産しており、少年工の作業内容は不明）³²
- ・土浦海軍第一航空廠（茨城県土浦市、2～3期生300人。成績優秀者は発動機部の航空金属材料研究に携わる）
- ・呉海軍第十一航空廠（広島県、200人）
- ・大村海軍第二十一航空廠（長崎県大村市、2～3期生400人。「零式水上観測機」「流星」など。昭和19年10月25日空襲にて壊滅）
- ・三菱航空機製作所（愛知県、「零戦」「銀河」「一式陸攻」など。昭和19年12月18日の空襲にて壊滅）
- ・中島航空機小泉製作所（群馬県、2,000人。「零戦」「銀河」「月光」など）

この他、千葉県の日建鉄株式会社（建設用アルミニウム製品生産、開戦後は飛行機の主翼生産）、兵庫県の川西飛行機株式会社鳴尾製作所及び川西姫路工場、東京都の早川機

械工場などに派遣された。これら高座海軍工廠以外の工場で働いた台湾人少年工の数は一説では 4,000 人を数える。³³

複数の工場で働いた少年工も多い。例えば 4 期生の李雪峰は、高座海軍工廠で基礎的訓練を受けた後、三菱重工名古屋航空機製作所に派遣された。この製作所は昭和 19 年 12 月 18 日に空襲で壊滅し、台湾人少年工も 25 名が犠牲となる。次に派遣されたのは川西飛行機鳴尾製作所であったが、この製作所も空襲に遭ったため、川西飛行機姫路製作所へ 200 名の少年工とともに移動した。しかし、6 月 22 日の空襲で壊滅、大和の寄宿舎に寮長として帰任した直後に 8 月 15 日の終戦を迎えた。³⁴

各工場では、遠く台湾から来たまだ幼い少年工達は日本人の同情を集めた。例えば横須賀海軍工廠では、食堂で働く女性や女学校卒業直後の女性達が休日には家庭に招いて食事を与え、衣類の綻びを直すなど、実の息子や弟のように接し、少年工がお礼に台湾から届いた砂糖を与えると大いに喜ばれた例がある。³⁵ また、少年工の働きに対しては称賛の声が多かったという。

2.3 横須賀海軍航空技術廠に派遣された東俊賢の例

高座海軍工廠以外の勤務地に派遣された少年工の例として、ここでは海軍航空技術廠で終戦まで働いた東俊賢を取り上げたい。東は上官の信頼を得て、特攻兵器「桜花」の生産に関わった。以下ではインタビューと回顧録を基に東の経験を記したい。³⁶

7 期生として昭和 19 年 5 月に大和到着、数日後に約 80 人の少年工と横須賀市追浜の海軍航空技術廠へ向かった東は、飛行機の基礎知識や図面の見方、溶接などの実習を経て、飛行機部品の溶接工程に配置された。宿舎は木造 2 階建の町屋寮で、朝 5 時起床の海軍式生活であり、夜間の 2 時間交代の不寝番、「甲板掃除」と言われる笛の合図に合わせた廊下の雑巾がけ、厳格な寝室の整理整頓に苦勞し、鉄拳制裁を食らった時には志願を後悔し、遠い台湾の故郷や母の顔を思い出しホームシックになったが、休日には鎌倉大仏や江ノ島から富士山を眺めて自らを慰めた。

ある時、東は一類（極秘）・二類（秘密）工場に出入りできるバッチと、戒厳令を含めていかなる時でも通用する赤文字で「非常突破」と印刷された特殊通行証を渡され、絶対機密の保持と「MXY 7」と書かれた掛札が着いた部品を最優先とすることを命令された。こうして桜花生産の一員に加えられた。

桜花試作機が完成した頃、特攻隊員代表 2 名が桜花の組立工場を訪ね、作業中の工員の前で「皆さまご苦勞様でした。今から敵撃滅に行つて来ます」と挨拶をした。その 1 人の下士官は 18 歳前後だった。その後、桜花 100 機の生産が始まり、溶接を担う東は徹夜の突貫作業が続いた。組立工場に部品を届ける時には桜花の操縦席を覗いたこともあった。

昭和 19 年 10 月の台湾沖航空戦が報じられると、台湾が空襲で大被害を受けたと聞いた台湾人少年工は作業現場を離れて集まり、故郷の惨禍を想像して涙を流した。これを見た

組長は職務怠慢と叱り、理由を問わずに全員の尻をガス用ゴムホースで叩いた。腹を立てた東達は、当日夜に自転車帰宅する組長に石を投げた。その後、組長は少年工に優しく接したという。

11月28日、東は隣接する横須賀海軍工廠で建造された新鋭空母「信濃」を沖合に見た。71,000トンと世界最大を誇るこの空母は、空襲が懸念される横須賀から呉海軍工廠に回航し、そこで艀装を施される予定であった。しかし翌未明、米潜水艦の攻撃に遭い潮岬沖で沈没した。僅か17時間の航海である。信濃は、呉からフィリピンと台湾に輸送する予定の桜花50機を搭載しており、信濃撃沈時には弾頭・燃料未搭載の桜花が海に浮き、浮き輪代わりとなって人命救助に役立ったと、東は後に知った。³⁷

昭和20年3月10日未明の東京大空襲の時は、空技廠と追浜飛行場滑走路付近に地下工場と地下格納庫を築く工事当番として台車で土を運んでいた。この時、東京方面の空が真っ赤になり、爆撃音が絶え間なく響き、低空を飛行するB29の機体が大きく見えた。対空砲火で撃墜されると火の玉となって海上に墜落し、大きな花火が四方八方に飛び散ったようだったという。

また、撃墜されたB29が工廠の大広場に運ばれてきたこともあった。機体の大きさに驚き、内部に入ることを許された東は、室内の広さや座席後部の防弾設備、操縦かんや計器パネルなどのすべてに目が眩んだ。その時、2人の技術少尉が、「米国の航空技術は日本をはるかに凌いでいる」と語っているのを耳にした。

東は、ロケット局地戦闘機「秋水」のテスト飛行も目撃した。大広場に出て上空を見上げていたら、追浜飛行場から離陸した秋水から突然ボンボンという大爆音が聞こえ、黒い煙とともに急速に落下した。その後、東は桜花に続いて秋水の部品溶接を担い、深夜までの残業が終戦まで連日続いた。

このように、東は日本海軍戦闘機製造の最前線で次々と新鋭機の生産に携わった。日本人上官からの信任を得たからであると言えるが、全く差別がなかったわけではない。いつも台湾人を「湾チャン」と侮蔑し、暴力を振るう日本人もいた。ただし、東は黙っていたのではなく、反撃していた。³⁸ そして終戦後は謝罪をしてきたので握手をして仲直りしたという。

台湾人少年工が反撃した例は他にもある。李雪峰は、海軍高座工廠で執拗に配膳役を命じる古参工員にその理由を尋ねると、平手打ちをされそうになった。しかし李は、より早く右拳で相手のみぞおちを突き、相手は膝から崩れ落ちた。³⁹ このように、理不尽な扱いを受けた時に断固として立ち向かった少年工は少なくなかった。

3. 少年工にとっての終戦と台湾帰還

終戦が訪れ、アメリカ軍が進駐すると、少年工はその指示に従い、日本の武装解除を手

伝った。自分たちの手で造った雷電を崖から落としたとの証言もある。⁴⁰

こうした彼らを見た早川金次技手は、「日本が負けた、俺達は自由になれるのだ、もう日本人の言うことはきかなくてもよいのだ、と云ふ気持ちからか、嬉々としている。自分達の前途もわからないのに」と思った。⁴¹ 台湾人寄宿舎に住み、食事と共にしてきた主計少尉の野口毅は、寄宿舎の屋根に晴天白日旗が翻るのを見た時は「さすがに心が痛みました」と回想している。⁴²

しかし多くの台湾人少年工は、日本の終戦をいかに受け入れるべきかを悩んだ。3期生の黄茂己は「中国人は勝ったと有頂天だ、一方台湾人は喜んでよいのか悲しむべきか、五里霧中だ、事実私も迷った。放送を聞き終わった、途端目の前が真暗になった」。そして日本に残ることを考えたが、少年工が信頼を寄せていた工場主任の伊藤茂中尉から「お父さんとお母さんがお元気なら帰れ」と説得されて台湾に帰ることを決めた。⁴³「錦に御旗を飾る」までは帰らないと考える者は決して少なくなかった。

横須賀の空技廠で働いていた東俊賢は、「緒戦の輝き戦果と勝利、日本帝国が戦争で負けるとは、夢にも思わなかった」。終戦の日、工員は大広場に集合して玉音放送を聞き、その後は廠長の和田操中將が指令台に上がって「日本は負けた、厚木方面では蹶起ありと聞いてるが、つまらないもので負けたものは負けたのである。日本は科学で負けたのだ！謙虚に受け止め、今後日本復興の為に、尽力すべきである」と訓示した。

終戦より1週間足らずで日本人の軍人や工員は空技廠から姿を消した。取り残された台湾人少年工は、炊事場に残されたわずかな大豆を煮たり浜辺で貝を拾って空腹をしのいだ。台湾に帰れると喜ぶ者もいたが、少年工は大和の寄宿舎の他に帰るところはなかった。東は9月下旬に大和に戻った。この時の台湾人少年工は、東によれば「終戦時にさ迷うみなし子」であった。⁴⁴

大和には、各地の軍需工場に派遣されていた台湾少年工が戻った。しかし高座海軍工廠の日本人職員や工員もわずかな残務整理員以外は復員し、台湾人少年約8,000人が寄宿舎に取り残された。彼らは、今後の生活や将来の進路など、すべて自ら解決しなくてはならない立場に追い込まれたのであった。

台湾人少年の境遇に関して、当時のある新聞は「7,800人の台湾人少年」が宿舎に取り残され、食料も次第に底を突き、「付近の畑を荒らして副食物をとるといふ不祥事まで惹起してゐる」。その理由は「工場解散とともに責任者は姿を消してしまった」からであり、「好条件に惹かれて渡航して来た」台湾人少年に対してあまりにも「冷い仕打ち」であると少年工に同情した。⁴⁵ また別の新聞によれば、台湾人少年は「食糧難と共に不穩の気配が濃厚」であり、米軍が「台湾人工員自警団の幹部十名」を大和署に呼び、法を犯すことがあれば「犯人を直ちに射殺する」「元工廠内へ拘置場を造り外出を許さぬ」と食料盗難などの不祥事を戒めたと報じている。⁴⁶

少年工の当座の生活維持と帰国の実現に尽力したのは、寄宿舎寮長の李雪峰であった。

戦後直後、李は石川舎監と運動場を歩き、今後の相談をした。石川は「私は金も無ければ権力もないので何もしてあげられることがない。皆さんがこれからはなくてはならない」と言った。この言葉を受けた李は、台中・台南・新竹・台北・高雄の5個大隊からなる中華民国高座台湾省民自治会を構成した。また、治安維持を司る自警隊を含む各種委員会を設けた。

さらに李をはじめとする幹部は神奈川県庁や海軍省と折衝を重ね、「我々の立場をはっきりさせてくれ」と問い質した。こうした努力の結果、少年工が帰国船を待つ間の生活費として神奈川県から月50円が支給されることになった。食料に関しても、農協から必要分を支給されることを取り付けた。また、帰国時には1人当たり1,000円の退職金を得ることができた。⁴⁷

殆どの少年工は台湾への帰国を望んだ。しかし戦後まで残った輸送船は少なく、日本人の復員船として利用されていたため、少年工が帰台するための第1便は昭和20年12月中旬まで待たなければならなかった。この第1便「長運丸」は約1,000人の少年工を乗せて台湾へと向かった。その後、昭和21(1946)年1月初頭の「氷川丸」(約2,000人)、1月下旬の「米山丸」(2,000人以上)と続き、2月に出航した「永祿丸」は2,000人以上の少年工を台湾へと帰還させた。⁴⁸

「米山丸」で帰還した東俊賢によれば、浦賀から乗船すると、雪が積もった富士山や丹沢の山が見えた。そして少年工の仲間と一緒に、「ラバウル小唄」の歌詞を変えて「さらば大和よまた来るまで」と合唱したとのことである。⁴⁹

4. 少年工を待っていた故郷台湾の戦後

日本敗戦により、台湾は中華民国の統治下に置かれることとなった。東俊賢は、「米山丸」で基隆港に到着した時、出発時に見た日の丸は既になく、「馴染みのない『晴天白日滿地紅』の大きな旗」が掲げられているのを見た。上陸後、基隆駅から専用列車で台南に向かう際、至る所で空襲の跡を見た。台南の自宅で家族と対面し、翌日叔父に会うと、無事帰還を祝福されると同時に「村の支那兵に近寄るべからず」と強く警告された。その時は意味が分からなかったという。

黄茂己が見た台湾は、「大陸を追われて台湾に逃げ込んできた外省人」が「戦勝気取りで役人は各自の懐稼ぎにあけ暮れ」ており、「巷には乞食があふれ、窃盗強盗は日常茶飯事で若い娘の人身販売も珍しくない」状態であった。⁵⁰ 台湾省行政長官に就任した陳儀(1883-1950年)率いる国民党の接收軍を見た1人は、「服装は乱れ、粗末な鍋や釜、雨傘を背負ってだらしなく、隊列も乱れて、長年見慣れてきた日本軍の規律正しい威風堂々の行進とは全く違った軍隊だった」という。⁵¹

少年工は、故郷台湾に戻ると、228事件の惨禍に遭遇し、昭和62(1987)年まで続く戒

厳令の中で生きることを余儀無くされた。この新たな苦難の中でいかなる人生を歩んだのか。

帰台直後の東俊賢は海技廠で習得した溶接技術を生かす道を考えたが、父は新たに「国語」となった北京語の習得を求めた。台南商業学校に復学すると、日本人教師が帰国したため教員不足が深刻であった。翌年に台南師範学校を受験した時には北京語の試験が全く分からず、父が教えてくれた「国語文尚未精通以後要努力学习」（国語文はいまだ通じず以後一層努力し習得する）の一文を答案用紙に書いた。他の受験生も北京語が出来なかったこともあり東は合格したが、入学後も北京語に苦勞した。東の学習を助けたのは、汪兆銘政権下で日本留学の経験があり、日本語が話せる北京出身の教師であった。

昭和 22（1947）年 3 月 5 日、台南銀座にいた東は、米国製の大型軍用トラックに乗った国民党兵が猛スピードで接近し、抵抗の意志を見せた台湾人青年 2 人を蹴散らす現場を見た。すぐに身の危険を感じて狭い路地に隠れ、山中の実家に避難すると、父は日本から持ち帰った住所名簿を直ちに焼き捨てるようにと言った。

228 事件が勃発すると、東に限らず多くの元少年工は住所名簿や写真を処分した。その 1 人であった李雪峰は、国民党に命を狙われ、上海に姿を隠した。こうして、かつての「敵国」日本の戦争遂行に協力した過去を隠しつつ台湾の新たな時代を生きたのである。その後、多くの元少年工は、日本語能力や日本で培った技術、そして日本人との人脈を生かし、戦後台湾の発展に大きく貢献するのであるが、この点は稿を改めて論じたい。

おわりに

13、4 歳の小学校卒業生から 18、9 歳の高級中学校卒業生で構成された台湾人少年工は、故郷や親元を離れる寂しさに耐え、危険を省みず日本に渡った。日本では空襲や機銃掃射等で 66 名の死者を出し、戦後は「みなし子」となった。⁵² 帰台後も、国民党支配下の弾圧や腐敗で辛酸を嘗めた。

しかし、元少年工と日本人の交流は現在も活発である。その端緒となったのは、終戦 18 年後の昭和 38（1963）年 11 月、大和市善徳寺の境内に建立された「戦没台湾少年之慰霊碑」であった。これは元海軍技手の早川金次が私財を投じたものである。昭和 20 年 7 月 30 日の少年工 6 人の死は帰宅を許した自分にあると後悔の念を抱き続けた早川は、空襲で焼失した平塚の自宅を再建せず、バラックに住み続けて慰霊碑建立に尽くした。投じた私財は当時の金額で約 100 万円であり、大和市の第一等地に豪邸が立つ金額だと石川公弘は言う。⁵³ 慰霊碑が建立されて台湾の新聞に掲載されると、元少年工は再び大和を訪れ始め、戒厳令解除を待って少年工の同窓組織である台湾高座会を結成した。

台湾人寄宿舎で少年工と寝食を共にしていた石川も、交流を促進するうえで多大な貢献を果たした。石川が大和市議会議員であった平成 4（1992）年 5 月、台湾高座会の元少年工

30 数名が大和市長を表敬訪問した。市長が外出中であったため石川が応対し、台湾人寄宿舎の舎監石川明雄の息子であることを明かすと、元少年工の1人が「私はあなたのランドセル姿を知っています」と答えた。ここから台湾高座会と日本との交流が加速した。⁵⁴

平成9(1997)年、台湾高座会は台湾風あずまや「台湾亭」を大和市に贈呈した。6人が命を落とした場所に近い引地川公園が建設場所選ばれた。⁵⁵ 平成11(1999)年には日本で命を落とした少年工の靖国神社合祀、平成15(2003)年10月には台湾少年工の第1陣(2期生)のさんとす丸横浜入港60周年を記念した「六十周年記念大会」が座間市民文化会館で開催された。この場には台湾の元少年工600人を含む1,000人が集まり、終戦で立ち消えた卒業及び在職証明書1,200名分が交付された。⁵⁶

台湾亭や靖国合祀、証明書の発行、そして複数回にわたる記念大会や連誼大会の実現には、元少年工、及び少年工と働いた日本人の多大な努力があった。そして今では、日台の高座会が築き上げてきた国際交流を後世に引き継ごうとしている。これらの活動については改めて記したい。

注

¹ 岡本喬『海軍厚木航空基地』(同成社、1987年)。

² 張瑞雄「留日高座青少年の台湾魂」(陳碧奎・張瑞雄・張良澤編『高座海軍工廠台湾少年工寫真帖』台北・前衛出版社、1997年)27ページ。

³ 「シリーズ 戦後70年 第3回 語り継ぐ『記録と記憶』——芹沢の地下壕に残る工廠の足跡」(『タウンニュース 座間版』2015年6月19日)など。

⁴ 石川公弘「台湾少年工との交流70年——回顧と展望」(講演、台湾高座会代表団を迎えての講演会・親睦会、海老名市ウィングス、2016年5月28日)。

⁵ 『神奈川新聞』(2016年5月28日)。

⁶ 涌田佑『郷土史としての厚木飛行場・高座海軍工廠』(私家版、2008年)55ページ。座間市市史編集委員の樋口雄一は、工廠建設のための用地取得により、自宅移転命令を受けた人物のインタビューをまとめている。『綾瀬市史』を参照。

⁷ 「昭和十七年十二月 台湾青少年採用の件申継書」(『大和市史 6 資料編 近現代 下』精興社、1994年)466ページ。

⁸ 開戦時、台湾人には兵役義務はなく、日中戦争が勃発した昭和12年には軍属・軍夫の募集があり、陸軍が志願兵を募るのは昭和17年4月、海軍は昭和18年8月のことである。台湾に徴兵制が施行されるのは昭和19年9月のことであり、この時は22,000名が徴集された。戦後までの台湾人軍人は80,433名、軍属・軍夫126,750名、戦死・病死者は30,304名である。伊藤潔『台湾——四百年の歴史と展望』(中公新書、1993年)130-131ページ。

⁹ 「昭和十七年十月 空C廠(高座海軍工廠)設立準備委員長引継書」(『大和市史 6 資料編 近現代 下』)462ページ。

¹⁰ 同上、487ページ。

¹¹ 「昭和十七年十二月 台湾青少年採用の件申継書」(同上)487-490ページ。

¹² 陳碧奎口述・林慧姪整理・張良澤校閲『赤手空拳——一個「少年工」的故事』(前衛出版社、1998年)。

¹³ 東俊賢(インタビュー、台北、2016年8月3日)。

¹⁴ 石川公弘『二つの祖国を生きた台湾人少年工』(並木書房、2013年)64-90ページ。

¹⁵ 宮本直人「台湾の教え子たち——生徒を空C廠に送った或る教師の『悔恨』——」(台湾高座

- 會編輯委員會編『難忘高座情』1999年) 219-229 ページ。同『台湾を愛す——舫船は宝船』(私家版、1998年)。
- ¹⁶ 王溪清「渡航第一陣、サントス丸の思い出」(『難忘高座情』) 239-245 ページ。
- ¹⁷ 同上。
- ¹⁸ 石川公弘『二つの祖国を生きた台湾少年工』16-19 ページ。
- ¹⁹ 林延祺 (インタビュー、台北、2016年6月12日)。
- ²⁰ 李雪峰 (インタビュー、台北、2016年6月12日)。
- ²¹ 『難忘高座情』45 ページ。
- ²² 上記で記した他にも、第7期生の嘉義出身者約100人は、岡山で訓練期間中、先行して基隆港より「帝香丸」で神戸に向かった例があるが、これらは資料が存在しない。『難忘高座情』25 ページ。
- ²³ 陳碧奎他『赤手空拳』66-69 ページ。
- ²⁴ 黄茂己「高座台湾少年工帰台七十周年所感」(台湾高座日台交流協会編「留日台湾高座会廿九回聯誼大会」、2015年) 117 ページ。
- ²⁵ 石川公弘『二つの祖国を生きた台湾少年工』。石川公弘講演(高座日台交流の会、2016年5月28日)。
- ²⁶ 元少年工謝禎泰の手記(早川金次「台湾少年工と高座海軍工廠の思い出」野口毅編『台湾少年工と第二の故郷——高座海軍工廠に結ばれた絆は今も』展転社、1999年) 104-105 ページ。
- ²⁷ 早川金次『流星——高座工廠と台湾少年の思い出』(そうぶん社、1987年) 112-113 ページ。
- ²⁸ 野口毅「終戦に前後して」(高座日台の会、2015年9月)。
- ²⁹ 浦田佑「郷土史としての厚木飛行場・高座海軍工廠」(浦田先生の話聞く会、2008年)。
- ³⁰ 石川公弘「台湾少年工と台湾を想う」(『台湾少年工と第二の故郷』) 127-129 ページ。
- ³¹ 日吉早苗『高座の光』(高座海軍工廠報国団、1944年8月)。
- ³² 『難忘高座情』63 ページ。
- ³³ 陳柏棕(中央研究院臺灣史研究所檔案館館員)(インタビュー、台北、2016年8月3日)。
- ³⁴ 石川公弘『二つの祖国を生きた台湾少年工』31-42 ページ。
- ³⁵ 『難忘高座情』63 ページ。
- ³⁶ 東俊賢(インタビュー、台北、2016年8月3日)。また以下を参照した。東俊賢「ライトアップ輝く台湾」(私家版、2016年)、東俊賢「戦後70 台湾日本語世代回想記」(私家版、2015年)、「極秘決戦機『桜花/秋水』の思い出——台湾少年が見た海軍空技廠の飛行機製造現場」(『丸』通号717号、2006年1月) 231-257 ページ。
- ³⁷ 手塚正己『軍艦武蔵 下巻』(新潮文庫、2009年) 433 ページ。
- ³⁸ 東俊賢「戦後70 台湾日本語世代回想記」96 ページ。
- ³⁹ 石川公弘『二つの祖国を生きた台湾少年工』33 ページ。
- ⁴⁰ 林延祺(インタビュー、台北、2016年6月12日)。
- ⁴¹ 早川金次『流星』119 ページ。
- ⁴² 野口毅「終戦に前後して」4 ページ。
- ⁴³ 黄茂己「高座台湾少年工帰台七十周年所感」19 ページ。
- ⁴⁴ 東俊賢「戦後70 台湾日本語世代回想記」94-100 ページ。
- ⁴⁵ 「台湾人の帰国に政府の態度冷淡 その日の生活にも困る現状」(『読売新聞』1945年11月20日)。
- ⁴⁶ 「台湾人が倉庫襲撃 神奈川県下で略奪続く」(『毎日新聞』(1945年11月18日)。
- ⁴⁷ 李雪峰(インタビュー、台北、2016年6月12日)。
- ⁴⁸ 『難忘高座情』126 ページ。
- ⁴⁹ 東俊賢『戦後70 台湾日本語世代回想記』。
- ⁵⁰ 黄茂己「高座台湾少年工帰台七十周年所感」19 ページ。
- ⁵¹ 山東国彦「台湾残留の一年半」(高座日台の会会報 春季号) 2015年4月) 13 ページ。
- ⁵² 『難忘高座情』191-193 ページ。
- ⁵³ 石川公弘「台湾少年工との交流70年——回顧と展望」(講演、台湾高座会代表団を迎えての

講演会・親睦会、海老名市ウィングス、2016年5月28日)

⁵⁴ 石川公弘『二つの祖国を生きた台湾少年工』191-193 ページ。

⁵⁵ 石川公弘「台湾少年工と台湾を想う」(野口編『台湾少年工と第二の故郷』) 152-157 ページ。

⁵⁶ 野口毅「日本を第二の故郷と呼ぶ台湾少年工への讃歌」(『正論』2003年12月) 280-293 ページ。

Received on November 9, 2016.